令和七年度

第五回

国語問題

〔注意事項〕

一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。

二、問題は[一]・[二]で、二十一ページにわたって印刷してあります。
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。

三、解答は、すべて解答用紙に記入し、**受験番号・氏名**をもれなく、正確に記入すること。

四、問題冊子の表紙にも、**受験番号・氏名**を必ず記入すること。

受験番号

氏名

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

一

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

> 中学一年生の「ぼく」（黒田朔弥）は、前日に同じ園芸部のメンバー二人（クラスメイトの西森諒・二年生で帰国子女のアズサ）と一緒にショッピングセンターに出かけたところ、朔弥の母と遭遇する。朔弥の母が、背が高く目つきの鋭い西森を見た目で不良と決めつけたことに対し、「ぼく」がきちんと反論しなかったことをアズサに叱られて口論となり、「ぼく」とアズサは気まずくなっていた。翌日、「ぼく」と西森は花壇の世話をしにやってきた。

ぼくたちは、また花壇に戻ってきて水をやった。今度はマリーゴールドとナスタチウム。鮮やかな黄色とオレンジ色が、夏って感じだ。

「ぼく、園芸部は、ぼくの居場所って感じがしてたから、みんなもそうだと思ってたんだ。だけど、アズサ、わたしの居場所は、ここじゃなくてアメリカだって言ったからさ。それを聞いたら、①なんか裏切られたような気がしたんだ。ぼくが勝手にそう思っただけで、アズサは別に裏切ってなんかいないってのはわかってるんだけど、でも、なんか、悲しくって……。」

「アズサのことはわかんないけど、おれは、ここ、おれの居場所だって気がするよ。他の場所にいるときより、自分らしくいられる。」「西森くん、教室では、あんまりしゃべらないもんね。」

「まあ、おれの場合は、成瀬がいるからなんだけどな。教室で目立つと、あいつがなんか言ってくるだろ。」

「②言い返せばいいのに。」

「別に言い返さなくてもいいよ。おれ、成瀬なんかのために、よけいな労力とか時間を使いたくないの。おれにとってどうで

もいいやつが、おれのことをどう思おうが、別に構わないから。」

「ふうん。」

「きのう、アズサは、黒田のお母さんがなにか言うのを、黒田が黙って見てたって、怒ってたけど、おれは気にならなかったよ。黒田のお母さんにどう思われてもいいからさ。だって、黒田のお母さんは、おれの仲間じゃないだろ。黒田がおれのこと信頼してくれてたら、それでいいんだ。」

西森くんは、自分でそう言って恥ずかしくなったみたいで、そのあと、すぐに、

「なあ、水やったけど、どうする？帰る？」

と、話題を変えた。

「うん。きのう草取りやったから、今日は、もう部誌だけ書いて帰るよ。あ、そうだ。ぼく、髪の毛を切りたいんだけど、(注1)ウェストウッズって何時からやってるの？」

「九時からだけど、なに、黒田、うちで髪切るの？」

「うん。」

「そっか。アズサも切ってくれたらいいのにな。」

そういえば、西森くん、初めてアズサに会った時も、髪の毛切るならおれんちに来てって言ってたな。

「なんで？」

「ヘアドネーションだよ。病気とか怪我で髪の毛が抜けちゃった子供にかつらを無料で(あ)テイキョウするために、うちの美容院で髪の毛の寄付を受け付けてるの。」

「そんなのあるんだ。じゃあ、ぼくも髪の毛を切ったら寄付するよ。」

「黒田のは短すぎるよ。三十一センチ以上ないとだめなんだ。」

ああ、だから、アズサなのか。

「まあ、とにかく、一回家に帰って、着替(きが)えたら、行くから。」
　後片づけをすませて家に帰ると、ぼくは、服を着替え、またすぐに家を出た。
　出かけるとき、お母さんは「どこに行くの？」とは聞かなかった。聞かれても西森くんの家の美容院で髪の毛を切るなんて言うつもりはなかったけど。
　ウェストウッズに行くと、真美子(まみこ)さんと西森くんのお母さんが(い)マンメンの笑(え)みで、
「いらっしゃいませ。」
と迎(むか)えてくれた。
　西森くんが、ぼくが来ることを話しておいてくれたのだろう。
　でも、西森くんはいなかった。気をきかせてくれたのかな。髪を切るところを見られるのって、なんか恥ずかしいから。
「はい、じゃあ、こちらへどうぞ。」
　真美子さんは、きのうと同じ鏡の前に座(すわ)るように言った。

〈中　略〉

　襟足(えり)をカットするために、真美子さんが、ぼくの頭をくいっと下に向けると、鏡の前の棚(たな)に置いてあったヘアドネーションのパンフレットが目に入った。
「あの、あとで、そのパンフレットもらってもいいですか。」
　ぼくがそう言うと、真美子さんは、
「ヘアドネーションに興味がある人、いるの？」
と聞いた。
「興味があるかどうかはわからないけど、③すごく長い髪の人を知ってるから。」

「そう。」

髪の毛を切った後は、またシャンプー台に行って髪をすすぎ、それから、ブローをしてもらった。

「はい、お疲(つか)れさまでした。」

シャンプーからブローまで、三十分で終わった。早いだけじゃなくて、うまいと思う。鏡の中の自分に、ぼくは、しばらく見入ってしまった。なんか別人になった気分だ。

ウキウキした気持ちでレジに行く。

「今日はちゃんとお金を持ってきてるから、友だち割引はいらないです。あ、でも、中学生料金にしてください。」

④なんだか知らないけど、言葉がすらすら出てきて、自分でびっくりした。

「はい、かしこまりました。シャンプー、カット、ブローで二千五百円でございます。」

ぼくは、財布(さいふ)から、昨日お母さんにもらった五千円札を出して、真美子さんに渡(わた)した。

レジが開くと、真美子さんは二千五百円のお釣(つ)りをくれた。料金表の価格は、税込(こ)みらしい。

「ありがとうございました。黒田くん、諒いるけど、会っていかなくていいの？」

「朝も学校で会ったし、午後から図書館で会うから、いいです。」

「そう。あ、これ、パンフレットね。アズサちゃんに渡してあげて。」

「え？あ、はい。」

真美子さん、アズサの髪が長いこと、知ってたんだ。

「ありがとうございました。また来ます。」

「はい、お待ちしております。」

ぼくは、真美子さんに手を振(ふ)って店を出た。

午後になると、いつものように図書館に行った。

　入り口を入ってすぐ左にある階段をのぼれば、学習室がある。アズサと顔が合わせづらいから、学習室に行こうかとも思ったけれど、ヘアドネーションのパンフレットも渡したいし、⑤謝(あやま)らなくちゃいけないという気持ちもあったので、いつも通り(注2)ＹＡコーナーに行った。

　それでも、アズサに見つからなかったら、謝るのはまた今度でいいかなと、ちょっと弱気になる。だから、本棚の陰(かげ)に隠(かく)れてしまうカウンターテーブルの一番端(はし)っこの席に座って、宿題を広げた。

　そこで、しばらく漢字の書き取りをしていたら、

「その髪、かっこいいじゃん」

と、アズサがとなりの席に座った。

　思ったより、早く見つかってしまった。

　落ち着け。アズサから声をかけてきたんだから、アズサも仲直りをしたいはずだ。タイミングをみて謝ろう。でも、そのタイミングを見極(みきわ)めるのが、ぼくはとても下手なんだけど。

「に、西森くんのおばあさんに切ってもらったんだ。」

「へえ、リョウのおばあさん、㋒上手だね。」

「うん。上手だと思う。あ、それで、これ。」

　ぼくは、ヘアドネーションのパンフレットをアズサに見せた。

「ああ、ヘアドネーションね。」

「知ってるの？」

「うん、知ってる。よく寄付してくれないかって、声かけられるもん。」

　ああ、そうか。そうだよな。アズサくらい髪が長い人ってあんまりいないから、そりゃあ、みんな声をかけるよね。

「なんで、髪切らないの？」

「なんか、⑥髪の毛を切っちゃったら、アメリカにいたときのわたしが、いなくなるような気がするから。」

言ってることが、よくわからない。

ぼくが、首をかしげていたら、アズサは、

「アメリカを知ってるわたしの一部が、消えてなくなるっていうのが、いやなの。(注3)ブロッサムも、日本に帰ってきてから洗ったことないいんだよ。アメリカの空気がしみ込んでるから洗いたくないいんだ。」

と続けた。

「ふうん。」

「サクヤ、きのうはごめん。」

とうとつに、アズサが謝ってきた。

「あ、うん。あの、ぼくも、アメリカ行けって言ってごめん。」

「慣れてるから気にしなくていいよ。そんなにアメリカがいいならアメリカに行けって、みんな言うもん。でも、サクヤは、他の子みたいにアメリカに行けって言わないと思ってたからショックだったんだよね。サクヤは、あんまりしゃべらないだけで、感情がないわけじゃないのにね。⑦ちょっとブロッサムと同じように思ってたかも。ごめんね。」

「ブロッサムと同じって？」

「わたしに(え)指図したり、それはおかしいって言ったりしないで、わたしの言うことを、だまって、うん、うん、って聞いてくれるから。あ、今、ブロッサムが話を聞くわけないじゃん、とか思ったんじゃない？」

「え、あの、べつに……。」

「でもね、ブロッサムは、わたしの一番の友だちで、わたしの気持ちを全部わかってくれてるんだよ。わたしの五歳(さい)の誕生日にうちに来てから、ずっと一緒にいるからさ。」

「あ、うん。あの、アズサにとってはブロッサムが一番の友だちかもしれないけど、でも、ぼくも……、ぼくは、アズサと

友だちだと思ってたから、アズサが、アメリカがわたしのいるべきところだって言った時、ぼく、悲しかったんだ。ぼくや西森くんと一緒に日本にいるよりアメリカがいいのかって。」

「友だちだし、仲間だよ。」

「でも、アメリカの方がいいんだよね？」

「アメリカに行きたいけど、もう行けないから、よけいにアメリカにしがみつきたくなっちゃうんだよね。うちのお父さん、会社でなんかやらかしちゃったみたいで、左遷（させん）されたんだ。左遷ってわかる？」

「出世できなくなったとか格下げされたとか、そういうことだよね？」

「うん。だから、お父さん、もう海外赴任（ふにん）することないの。お給料も安くなっちゃってさ。お母さんも働こうとしたんだけど、お父さんがアメリカに赴任するときに仕事辞（や）めて、それから十年以上、働いてなかったから、仕事探しても見つからないんだよね。うちのお母さん、すごくプライド高いから、スーパーのレジのパートとか、派遣（はけん）なんかはやりたくないんだって。でも、家にずっといて専業主婦っていうのもいやだから、人権団体なんかに入って活動してるんだ。日本の学校は人権を無視してるって思うことが多いから、お母さんがそういう活動をするのは構わないんだけど、でも、なんか、それがⓐ生きがいみたいになっちゃって、御飯（ごはん）も作ってくれなくなったの。だから、わたしの晩御飯は、いつもコンビニ弁当だよ。日本のコンビニの御飯って、おいしいから別にいいんだけどね。お父さんも外で食べることが多くて、わたし一人で、御飯なんか作る気しないしさ。」

　ああ、だから、あんなにパスタサラダの容器があったのか。

「あー、ごめん。なんか、いっぱいしゃべっちゃったね。でも、まだまだ言いたりないよ。ほんとは帰国子女（注４）枠（わく）のある私立の女子校に行くはずだったのに、お金がないから通えなくなったしさ。まあ、とにかく、日本に帰ってきてから全部ぐちゃぐちゃになったから、⑧アメリカに帰りたいって思っちゃうんだよね。」

　アズサは、英語だったら、どれくらいしゃべるんだろうって心配になるくらい、日本語でいっぱいしゃべった。いっぱい

すぎて、ぼくの頭は全部の情報を処理できなかった。

結局、日本がいやで、アメリカが恋(こい)しいってことでいいのかなあ？

「でも、よく考えたら、アメリカがそれほどいいわけでもなかったよ。アジア人だからって差別されたこともあるし、食べ物はおいしくないし、お風呂(ふろ)も浅いし。(注5)池魚故淵(ちぎょこえん)だね。」

「チギョコエン？」

「故郷を懐(なつ)かしむって感じ？　⑨思い出補整？」

「アズサ、日本語、知ってるじゃん。」

「うん、四文字熟語は、かっこいいから好きなの。とにかくさ、アメリカがわたしの居場所っていうのも、ほんとはちょっと違(ちが)うんだ。いつも、ここじゃないどこかを探してる感じ。でも、自分の居場所はどこにもない感じがする。」

ああ、それ、ちょっとわかる気がする。

「あのさ、入学したばかりのころは、ぼくもそんな感じがしてたよ。でも、園芸部に入って、みんなと土をいじってるうちに、ぼくはここにいてもいいんだなって、思えるようになった。」

ぼくが、そう言ったら、アズサが意外そうな顔をした。

「サクヤでも、居場所がないって思うんだ？」

「思うよ。」

「⑩あんなお母さんがいるのに？」

「あんなお母さんがいるからだよ。」

「お母さんがすごく守ってくれてるから、家がサクヤの居場所なのかと思ってた。」

「全然違うよ。お母さん、すごくうるさいもん。」

お母さんは、ぼくのことを守ってるわけじゃない。ぼくのことが心配って言いながら、ぼくを自分の思うとおりにしようと

してるんだと思う。今のままのぼくじゃ、お母さんにとってだめな息子だから。

「アズサこそ、家にだれもいないんだから、家で好きなことできるじゃん。家が居場所にならないの？」

「ならないよ。」

ぼくたちは、顔を見合わせた。

うちのお母さんとアズサのお母さんって正反対だけど、ぼくたちが家に居場所がないって思うのは一緒なんだなあ。変なの。

「ああ。こんな隅にいたんだ。わかんなかった。」

西森くんが、やってきた。

「お、黒田、かっこいいじゃん。」

西森くんが、ぼくの頭のてっぺんに手をのせて、ポンポンと髪をさわった。

「うん、ぼくもそう思う。真美子さん、上手だよね。」

「真美子さん、若いころは、よくコンテストで入賞とかしてたみたいだよ。」

「へえ。」

アズサが椅子から立ち上がった。

「あっちの四人掛けの机に行く？」

西森くんがそう言うと、アズサは首を横に振った。

「ううん。わたしも、リョウのおばあさんに、髪の毛切ってもらおうかなと思って。」

「え？」

「まじ？」

「なんで急に？」

「わかんないけど、急に切りたくなった。リョウ、お店の場所教えて。」
「いいけど、おれも一緒に行こうか?」
「いいよ。今来たばっかりじゃん。」
「ああ、じゃあ、駅前の商店街のウェストウッズって店。商店街まで行けばすぐにわかるから。」
そういって、西森くんはノートをヤブって、簡単な地図と店の電話番号を書いた。
「ありがとう。じゃあね。」
「来週は、畑の水やり、アズサの番だからな。」
「わかってる。」
「あ、そうだ、アズサ、オクラの花が咲(さ)いたんだよ。」
「ほんと?」
アズサの顔が、ほころんだ。
「うん、すごくきれいだから、ウェストウッズに行く途中(とちゅう)、学校に寄って見てくるといいよ。」
「うん、そうする。じゃあね。」
アズサは、笑顔(えがお)のまま図書館を出ていった。

（花里真希(はなざとまき)『ハーベスト』）

（注１）ウェストウッズ…西森の祖母真美子が経営している美容院。
（注２）ＹＡコーナー…「ＹＡ」とは「ヤング・アダルト」のこと。ここでは、主に中学生・高校生を対象にした図書コーナーのこと。
（注３）ブロッサム…アズサがいつも持っているユニコーンのぬいぐるみ。
（注４）帰国子女枠…海外で教育を受けた生徒が日本の学校を受験する際に特別に設けられた募集人数の枠のこと。
（注５）池魚故淵…池の魚が生まれた池を懐かしく思うことから、旅人が故郷を懐かしく思うことのたとえ。

問一　══線㋐～㋔の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直して書きなさい。

問二　〰〰線ⓐ「生きがい」・ⓑ「ほころんだ」の意味として最も適当なものをそれぞれ後の中から選び、記号で答えなさい。

ⓐ「生きがい」
ア　生活していくために身につけた特技
イ　子供や孫に引き継いでいくべき仕事
ウ　生きる意味を感じさせてくれるもの
エ　生まれながらに持っている才能や能力

ⓑ「ほころんだ」
ア　表情がやわらいだ
イ　思わず顔が赤くなった
ウ　真剣な顔つきになった
エ　おどろいて目を見開いた

問三　──線①「なんか裏切られたような気がしたんだ」とありますが、「ぼく」はなぜ「なんか裏切られたような気がした」のでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　アズサよりも自分の方が園芸部を大切に思っているつもりでいたから。
イ　アズサにとって園芸部は居場所ではないと言われたような気がしたから。
ウ　アズサは園芸部での活動よりも自分たちといることが好きなのだと思っていたから。
エ　アズサにはいつも気をつかってあげているのに、それをわかってもらえなかったから。

問四　――線②「別に言い返さなくてもいいよ」とありますが、ここから西森くんのどういう考え方がわかりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　特に親しくない人間と話すことは時間のむだであるという考え方。
イ　友人に自分がどう思われても、自分が正しければよいという考え方。
ウ　大切な仲間が自分を信頼してくれていることが重要だという考え方。
エ　人によって考え方は異なるが、どれも尊重されるべきだという考え方。

問五　――線③「すごく長い髪の人を知ってるから」とありますが、それは誰（だれ）のことでしょうか。本文中のことばを抜き出して答えなさい。

問六　――線④「なんだか知らないけど、言葉がすらすら出てきて、自分でびっくりした」とありますが、ここでは、「ぼく」のどんな姿が描（えが）かれていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　心に思ってもいないことでも、平気で口にできるようになってしまった姿。
イ　初めて会った人にも、堂々と自分の意見を主張できるようになった姿。
ウ　何かにあやつられているように、無意識に口が動いてしまっている姿。
エ　自分に自信が持てるようになり、いつもより自然に話せるようになった姿。

問七　――線⑤「謝（あやま）らなくちゃいけないという気持ちもあった」とありますが、何についてそう思っていたのですか。この後を読んで、二十字以内で答えなさい。

問八　━━線⑥「髪の毛を切っちゃったら、アメリカにいたときのわたしが、いなくなるような気がするから」とありますが、ここからアズサのどのような思いがわかりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　髪型を変えることで、アメリカの友人が自分に持つイメージをこわしたくないという思い。
イ　日本での生活に早くなじみ、幸せではなかったアメリカでの自分に決別したいという思い。
ウ　アメリカにいたころの思い出を心の支えにしているため、それを手放したくないという思い。
エ　アメリカではいやなこともあったが、その時の苦労を忘れず、これからに生かしたいという思い。

問九　━━線⑦「ちょっとブロッサムと同じように思ってたかも。ごめんね」とありますが、アズサは「サクヤ」をどのように思っていたのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　困ったときにはたがいに助け合える、かけがえのない存在。
イ　自分のことを昔からよく知っている、一番の理解者といえる存在。
ウ　気分が乗らない時には無視してもかまわない、とるにたりない存在。
エ　特に自分の考えはなく、アズサの気持ちをただ受けとめてくれる存在。

問十　━━線⑧「アメリカに帰りたいって思っちゃうんだよね」とありますが、ここからアズサのどのような気持ちがわかりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　生まれ育った場所が懐(なつ)かしく、自分のふるさとはやはりアメリカだと感じている。
イ　日本での生活がうまくいかないことから、アメリカでの思い出にしがみついている。
ウ　アメリカでの生活がすばらしかったので、日本での生活になじむことができないでいる。
エ　英語の方が話しやすいため、日本では自分の思ったことが言えず、もどかしさを感じている。

問十一　――線⑨「思い出補整」とありますが、ここではどういう意味ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　思い出が時間とともに色あせてしまうこと。
イ　思い出に必要以上にこだわってしまうこと。
ウ　思い出をいつまでも忘れられないでいること。
エ　思い出が実際よりもよいものに感じられること。

問十二　――線⑩「あんなお母さんがいるのに？」「あんなお母さんがいるからだよ」とありますが、次の【　　】にそれぞれ入ることばを本文に即して考え、「ぼく」のお母さんについての、アズサと「ぼく」の考え方の違いを説明しなさい。

「ぼく」のお母さんについて、

アズサは【　　　　　　】存在だと感じているが、
「ぼく」は【　　　　　　】存在だと感じている。

問十三　この文章では、「居場所」ということばが多く登場しますが、「居場所」とはどういうところだと言えますか。「ぼく」「西森くん」「アズサ」三人の話をふまえて、考えて書きなさい。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

テレビのバラエティー番組等でも時々見るバンジージャンプは、オーストラリア東方の南太平洋に浮かぶ国、バヌアツのペンテコスト島で行われるナゴールと呼ばれる通過儀礼（成人になるための儀式）が起源と言われています。バンジージャンプには伸縮性のあるゴムが使われますが、ナゴールではヤムイモのつるを足に巻きつけ、高さ数十メートルにもなるやぐら(注1)の上から飛び降りるので、その衝撃はバンジージャンプの比ではないそうです。この儀式の重要な点は、参加者はただやぐらから飛び降りるだけでなく、①自分が使うヤムイモのつるを、その長さや強度なども含めて自分で決めることになっていることです。つるが長過ぎたり、弱かったりすれば、地面に激突することになります。実際けが人が出ることも珍しくなく、時には死に至ることもあるそうです。(注2)アトラクションと化している現代のバンジージャンプでは、安全性は基本的に事業者が担保(注3)し、飛ぶ側は誓約書を書いてお金を払うだけです。しかし、ナゴールは単なるⓐやんちゃ(か)な度胸試しではなく、まさに命がけであり、自分の命を自分で守るという責任が負わされています。だからこそ、それができることが大人の証、つまり通過儀礼とされるのです。

こういった通過儀礼は世界各国にあり、［１］アフリカのマサイ族では、かつてライオンを投げやりで仕留めることが成人になるための通過儀礼として課されていたそうです。サバンナに一人で出かけて百獣の王であるライオンを狙うのですから、逆に命を落とすことも当然時には起こります。近年ではライオンの個体数の減少からこの儀礼は禁止されたそうですが、これもⒶ【　】真【　】銘の命がけです。しかし、この通過儀礼を成し遂げることで、一人前の男として認められ、大人の仲間入りができたのです。

こういった命がけの通過儀礼は、②現代の我々から見れば理解できない野蛮な風習のようにも映ります。いくら通過儀礼と言ってもⓑ死んでしまっては元も子もない。物には程度というものがあり、そんな過酷な試練は課すべきではない。確かにその通りでしょう。しかし、ではどうしてそんな儀式が世界各地にあるのか？現代の自分たちの常識で「野蛮な風習」と簡単に

切り捨ててしまうのではなく、そのことの意味をもう少し考えてみる価値があるのではないか、私はそう思うのです。

こういった通過儀礼に共通していることは、恐怖心に打ち勝つ、そして困難なことをやり遂げる、この２点です。お恥ずかしい話ですが、私は結構、臆病な方です。③飛行機に乗る時などは、毎回、離陸の際に墜落したらどうしようなどと考えてしまいます。国際航空運送協会（ＩＡＴＡ）が２０１９年に発表したデータでは、（き）飛行機の事故発生確率は１００万フライトあたり１・13回とのことです。単純に計算すれば、たとえば毎日飛行機で職場までオウフクしたとしても、事故にあう確率は１２００年に１回程度になります。（注４）『枕草子』を書いた清少納言が（注５）「けふも、ひこふき、いとをかし」とでも言いながら、平安時代からいままで毎日飛行機に乗り続けていたら、１回くらいは事故にあっているかもしれない。そんなレベルの話です。

しかし、です。（く）厳密に考えれば、清少納言が初めて飛行機に乗った時に事故にあってしまう確率もゼロではない。それもまた事実です。そして言うまでもなく、それは清少納言だけでなく誰が飛行機に乗っても同じであり、つまり臆病な私の心配にもまったく根拠がないとは言い切れないのです。

実は私たちの周りには多くの小さな（注６）リスクが無数に存在しています。新型コロナウイルスの（注７）パンデミックで、バスや電車のつり革やドアノブなどを触ることのリスクが指摘され、アルコールで手を（け）ショウドクすることも日常の光景となりました。しかし、以前から潔癖症と呼ばれる人々はそういった「ばい菌」が周囲にいることに敏感で、バスや電車のつり革を触るなんてとんでもない、と感じていたのです。潔癖症の人たちは、ややもすれば〝病的〟などと形容されますが、決してその主張に根拠がない訳ではなく、コロナ禍は実際に一定のリスクが存在していることを（注８）顕在化させました。車に乗れば、あるいは普通に町を歩いていても交通事故にあうリスクがあり、山に行けば遭難の、また海に行けば溺れてしまうリスクが実際にあります。科学がこの世のすべてを解明している訳でもないのですから、地球に宇宙人が来ていることも、お化けがいることも、先祖を（注９）供養しなければたたりがあることも、完全に否定できる訳ではありません。もちろん（注10）蓋然性の高いリスクから、普通はあり得ないようなリスクまで、確率を考えれば幅はありますが、ゼロにならないリスクはこの世に無限に存在している。その

ことは（注11）厳然たる事実です。

幸いなことに、日頃私たちはそんなリスクのことをあまり意識していません。考え始めればリスクは無限にあるのですから、④心の防衛機能として生まれながらに人はそのようにできているのかもしれません。しかし、意識しようとしまいとリスクはどこにでもあるのがこの世界の本当の姿であり、たとえば私たちが何か重要な選択をしなければならなくなった時、それはⓒ否応なく目の前に現れてきます。あまり想像したくないたとえ話にはなりますが、もし腎臓がんになったとして、腎臓全部を摘出するか、がんになった箇所を部分的に切除するか、という選択があったとしましょう。部分切除で済ませた場合は体への負担が少なくて済みますが、がんが残ってしまうリスクがあります。一方、全部摘出すれば、その意味ではより安全ですが、腎臓が一つになってしまうと、将来的に腎機能に障害が出て、人工透析（注12）生活になってしまうリスクが増大します。［２］、あるいはあなたが野球少年で、野球推薦で強豪校に入るか、普通に試験を受けて進学校に入るかという選択があったとしましょう。プロ野球選手を目指すのなら、強豪校に入って甲子園のような大きな大会に出場した方が良いことは間違いありません。しかし、プロ野球選手となって活躍できる人は（注13）エリート中のエリートで、多くの人は夢叶わず途中で脱落していきます。進学校に行って公務員にでもなれば、より安定した生活が保障されるでしょう。しかし、仕事が退屈でプロ野球選手になりたかったという自分の思いが人生を通じてずっと残ってしまうようなことにもなりかねません。

さてこんな場合、どのような選択をするのが「正解」なのでしょうか？　人生を大きく左右しかねない重い選択を目の前にすると、その選択に伴うリスクが誰でも気になります。なるべく失敗のない良い選択ができるようにと情報を集め、選択肢のリスクと（注14）ベネフィットを正確に把握しようと多くの人が（こ）努めることでしょうし、実際それは大切で必要なことです。［３］、ベストな選択は何か、それを一生懸命考え、調べていけばいくほど、それまで見えなかったリスクが見えてきたり、結論が真逆になっている情報があることに気づいたりして、何が正しいのか、どうしていいかわからなくなる。「ベストの選択がしたい」、「リスクのない選択をしたい」という思いが強すぎると、Ⓑ【　】がすくんで、何も選べなくなってしまう。

学校の勉強であれば、より詳(くわ)しく調べていけばいつかは正解にたどり着く、それが普通かもしれません。しかし、現実の世界を生きていくということは、実はそんなものではない。どんな選択をしてもそれに伴うリスクが必ず存在し、現実の問題の多くには、そもそも絶対正しい「正解」なんてない。でも、その中で私たちは何かを選んでいかなくてはならないのです。何が正解なのかわからない、自分の選択は間違いなのかもしれない。そんな恐怖に耐(た)えて、自分の責任で何かを選んでいくのです。より良い選択をするための努力はとても大切です。でも、自分のやれる限りの準備をしたら、⑤<u>あとはもう“飛ぶ”しかない</u>。それができなければ、大人になれない。一人の人間として、この世界と対峙(たいじ)（注15）して生きていくことができない。それを世界各国にある過酷な通過儀礼は教えてくれているのではないか、私はそう思うのです。

（中屋敷均(なかやしきひとし)『わからない世界と向き合うために』）

（注１）やぐら…木材などを高く積み上げて造った台状の建築物。
（注２）アトラクション…客が楽しむための遊具・施設(しせつ)・イベントのこと。
（注３）担保…将来生じるかもしれない不利益に対して、それを補うことを保証すること。
（注４）『枕草子』…平安時代中期、清少納言によって書かれた随筆(ずいひつ)。
（注５）「けふも、ひこふき、いとをかし」…「今日も、飛行機、いとおかし」と読む、「をかし」は「趣(おもむき)がある」という意味で、『枕草子』によく登場する。
（注６）リスク…危険の生じる可能性。
（注７）パンデミック…感染症が世界的に大流行すること。
（注８）顕在化…形にあらわれてはっきりすること。
（注９）供養…仏像やお墓にものを供えたりお経をあげたりして、霊(れい)をなぐさめること。
（注10）蓋然性…多分こうなるだろうという、ものごとが起こる可能性の度合い。
（注11）厳然たる…おごそかで動かしがたいさま。
（注12）人工透析…腎臓の病気などの治療(りょう)法の一つ。二〜三日に一度通院する必要が生じる。
（注13）エリート…選ばれた少数のすぐれた人。
（注14）ベネフィット…利益のこと。
（注15）対峙…対立する関係にある二つのものが向かい合っている状態。

問一　＝＝線㋕〜㋙の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直して書きなさい。

問二　［１］〜［３］に入ることばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　つまり　　イ　また　　ウ　しかも　　エ　たとえば　　オ　しかし

問三　慣用表現に関する次の（１）・（２）の問いに答えなさい。

（１）－－－線Ⓐ「【　】真【　】銘（めい）」の【　】に同じ漢字一字を入れ、「うそいつわりなく本当であること」という意味の四字熟語を完成させなさい。

（２）－－－線Ⓑ「【　】がすくんで」の【　】に漢字一字を入れて、「恐怖や緊張（きん）で体が動かなくなる」という意味の慣用表現を完成させなさい。

問四　〰〰線ⓐ「やんちゃな」・ⓑ「元も子もない」・ⓒ「否応（いやおう）なく」の意味として最も適当なものをそれぞれ後の中から選び、記号で答えなさい。

ⓐ「やんちゃな」

ア　元気がよくてわんぱくな
イ　好奇（き）心が強く頭の回転が速い
ウ　生意気で自信にあふれている
エ　恥（は）ずかしがりやでひかえめな

ⓑ「元も子もない」
ア　最初から何もあてにしないこと
イ　すべてがすっかり元通りになること
ウ　大切なものを失って何も残らないこと
エ　原因がわからず対処法がわからないこと

ⓒ「否応なく」
ア　迷わずに即座(そく)に行動するさま
イ　自分の意見をつらぬき通すさま
ウ　好き嫌(きら)いがはっきりしているさま
エ　自分の意志に関係なく強制されるさま

問五　――線①「自分が使うヤムイモのつるを、その長さや強度なども含(ふく)めて自分で決めることになっている」とありますが、それはなぜですか。本文のことばを用いて答えなさい。

問六　――線②「現代の我々から見れば理解できない野蛮(ばん)な風習」とありますが、どういうところが、現代の我々からみて「野蛮」に映るのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア　ただ大人になるためだけに、罪のない生き物を殺すところ。
イ　ただ大人になるためだけに、自分の命を危険にさらすところ。
ウ　ただスリルを味わうためだけに、罪のない生き物を殺すところ。
エ　ただスリルを味わうためだけに、自分の命を危険にさらすところ。

問七　――線③「飛行機に乗る時などは、毎回、離陸の際に墜落したらどうしようなどと考えてしまいます」とありますが、ここで飛行機の話題にふれているのは何のためですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分が人並みはずれて臆病であることを示すため。
イ　どんな場合もリスクはゼロにならないことを示すため。
ウ　現代における命がけの通過儀礼であることを示すため。
エ　飛行機の墜落事故の発生確率が極めて低いことを示すため。

問八　――線④「心の防衛機能」とはどういうことですか。本文中のことばを用いて三十字以内で答えなさい。

問九　学校の勉強と現実の世界の違いについて、筆者はどのように考えていますか。次の説明文の□にあてはまることばを、それぞれ五字以内で書きなさい。

学校の勉強は□が、現実の世界は□。

問十　――線⑤「あとはもう〝飛ぶ〟しかない」とありますが、この文章において「〝飛ぶ〟」とはどのようなことを指していますか。「こと。」につづくように、本文中から十五字以内で抜き出しなさい。